

【暗証聖句】

「すると、玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言い、また、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた。」ヨハネの黙示録 21 章 5 節

【日・新しい天と新しい地】

イザヤ 65 章に、バビロン捕囚から帰還したイスラエルの民が、神様に忠実であったなら、廃墟となっていたエルサレムは全く新しくなることが語られています。

イザヤ書 65 章 17 節「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。初めからのことを思い起こす者はない。それはだれの心にも上ることはない。」

「エルサレムを再建する」ではなく、天地創造の時に使われたバーラー（創造する）と同じ言葉を使い、「新しい天と新しい地を創造する」と主は言われました。そこはあまりにも素晴らしい世界であるため、以前の暮らしを思い出すことすらありません。具体的に以下のようなことが書かれています。

- ① 喜びの世界・・・「見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして、その民を喜び楽しむものとして創造する」イザヤ 65:18
- ② 嘆き悲しみが無い・・・「泣く声、叫ぶ声は、再びその中に響くことがない」イザヤ 65:19
- ③ 長生きする・・・「もはや若死にする者も、年老いて長寿を満たさない者もなくなる」イザヤ 65:20
- ④ 平和な世界・・・「狼と小羊は共に草をはみ、獅子は牛のようにわらを食べ・・・」イザヤ 65:25

このような素晴らしい世界がこの地上に完成されていたら、どれほど素晴らしいかたことでしょう。しかし、残念ながら、この計画は期待通りに実現しませんでした。イスラエルは再び神様の御心から離れ、神様を悲しませることばかりでした。しかし、この新天新地を創造するという神様のご計画が、破棄されたわけではありませんでした。このイザヤ書 65 章の言葉は、更に壮大な預言として、イスラエル民族だけでなく、すべての神に忠実な人々が招かれる新天新地の創造へと発展していくのです。ヨハネは、実際にこの新天新地を幻の中で見せられました。

黙示録 21:1～4「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもものは過ぎ去ったからである。」

圧倒的な新天新地の光景です。この世界は完全に作り変えられ、海も無くなり、天から都が降ってきます。そして、神様がいつも共にいてくださり、死も悲しみも嘆きも労苦もありません。

またペテロも、「わたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいる」(第二ペテロ 3:13)と言っています。ペテロは新天新地を義の宿る新しい世界と表現しています。そこには罪や汚れが一切ありません。義とはキリストのことであります。イエス様がいつもおられるので、義が輝き、罪の暗さが一切ないのです。皆さんにとっても、この新しい天と地は希望となっているのでしょうか。

【月・神の神殿で】

黙示録の天国の描写では、神殿で大勢の天使たちが主を賛美している光景が描かれています。天には神殿があり、そこでは常に天の軍勢が神様を賛美し、礼拝していることがわかります。ただ、人間が罪を犯したときから、神殿の聖所は、人間の救いを提供する場所にもなりました。それゆえ、イエス様は屠られた小羊として登場するのです。

ところで興味深いことに、新天新地の新しい都には神殿が無いと書かれています。

黙示録 21:22 「都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからである。」

新しいエルサレムに神殿がないのは、神様を礼拝することがないからではなく、全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからであると、その理由が説明されています。神殿とは、神様が宿る限定的な場所です。新天地では、常に神の幕屋が人の間にあり、神様は常に人と共に住んでくださるので、いつでも、どこでも神様を礼拝できるということなのです。その意

味で、限定された神殿の必要はもうないということなのでしょう。いわば、都そのものが神殿と言っても良いかもしれません。ここで重要なことは、どこで礼拝をささげるかという場所の問題ではなく、常に、どこでも主を礼拝できるということであり、礼拝の中心は常に主なるキリストであるということです。ここに礼拝の本質があるのです。

### 【火・神の御前で】

テモテへの手紙一 6 章 16 節に、「唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることのできない方です」と、神様について書かれてあります。ということは、天国に行っても私たちは神様を見ることはできないのでしょうか。イエス様については、「そのとき御子をありのままに見る」とヨハネの手紙一 3 章 2 節に書いてあるので、この目ではっきりと見るようになることは分かるのですが、問題は父なる神様です。

イエス様は、「心の清い人たちは幸いである。その人たちは神を見る」(マタイ 5:8)と言われましたが、これは象徴的なことを言っておられるのでしょうか。そうではありません。黙示録 22 章 3、4 節に、はっきりとこう書かれてあります。

「もはや、呪われるものは何一つない。神と小羊の玉座が都にあって、神の僕たちは神を礼拝し、御顔を仰ぎ見る。彼らの額には、神の名が記されている。」

また各時代の争闘下巻P465には、次のように書かれてあります。

「神の民には、天父と御子とに自由に交わる特権がある・・・その時には、中間に薄暗い幕をはさまずに、顔と顔を合わせて神を見る。我々は神の御前に立ち、その御顔を見るのである」

二心でなく、混じりけのない清い心を持って、神様にお会いする準備をしたいものであります。神様を見るものは、聖霊の力により、「御子が清いように、自分を清める」(第一ヨハネ 3:3)のです。

### 【水・もはや死も涙もない】

新天新地には、この世界が創造された最初のときのように、「死はなく、悲しみも嘆きも労苦もない」(黙示録 21 章 4 節)と書かれてあります。これは私たちの希望です。このことは旧約の預言者を通しすでに語られていた約束でもあります。

イザヤ書 25 章 8 節 「死を永久に滅ぼしてください。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい、御自分の民の恥を地上からぬぐい去ってください。これは主が語られたことである。」

本来、人間は罪さえ侵さなければ、死も涙もない世界で幸せを生きるはずでした。罪の結果、失ってしまった本来あるべき世界を、神様はもう一度与えてくださるのです。死も涙もない世界を創造することができるのでしょうか。

幼い男の子が、病気のために長く生きることができない状態にありました。入院先の病院で病状が悪化、いよいよ最後の時を迎えようとしていた時、看護師さんから「もうすぐおうちに帰ることができるからね」と言われて、男の子は目を輝かせて喜びました。小さな鞆に大切なものを入れて、帰り支度までしています。母親は、そんな望みのないことを言って、子供にありえない希望を持たせるなんてひどすぎると、その看護師によほど文句を言ってやろうかと思いました。ところが、男の子は、「僕が帰るおうちはね、天国にあるんだよ。看護師さんがね、イエス様が天国にたくさんおうちを用意してくださっているって、そして天国にはね、病気は一つもないだよって、教えてくれたんだ」と言ったのです。

死も涙もない世界で、永遠に生きる。この地上での悲しみや苦しみが大きければ大きいほど、この新しい世界に入る喜びは大きいのです。

### 【木・彼らの額には神の名が記され】

救われる者たちの額には、神の名がしるされていきます(黙示録 22:4)。神様の名が記されるとは、神様のものとなっているということです。そのしるしが、額におされているということは、その人の考えることが神様の考えることと一致し、一つとなっているということでもあります。私たちの思いが、主の思いである聖書のみ言葉と一致する、あるいは一致させたいと心から願っているなら、それは神の印がおされている証拠です。この逆は獣の印ですが、それは自分の思いが悪魔の思いと一致していることを意味します。人間は、最終的にこのどちらかになります。

しばしば、人は善と悪の両方をもっていると言われます。だから、善人であっても、過ちを犯してしまうことも少なくないのですが、しかし、心の思いにおいては、どちらか一方しかありません。もし思いが主と一つなら、罪を喜ぶことはできません。罪を犯してしまった後は、後悔と悲しみでいっぱいになります。その砕かれた心を主は受け入れ、赦してくださいます。このことを信じる信仰によって、私たちは義とされます。しかし、悪魔の思いと一致しているなら、罪を罪とも思わず、むしろそれを喜んでいる自分があるはずで、主の御前に悔いることもありません。どんな人にも良心が与えられ、罪を悔いる気持ちと与えられていることの中に、神様の愛と導きがあるのです。